

顕現後第5主日 マタイ5章13―20節

〔直訳〕

13 あなたがたは ある 地の塩で。

だがもし その塩が 馬鹿になるなら、
何によつて それは塩づけられよう。

何に対しても もはや力がない

以外には 外に投げられ 人々によつて踏みつけられること。

14 あなたがたは ある 世の光で。

できない 町は 隠れることが 山の上に建っているものは。

15 また 人々は火をつける ともし火に

そして 人々は置かない それを 舂の下には

そうではなく 燭台の上に、

そして それは輝く すべてに 家にあるもの。

16 このように 輝きなさい あなたがたの光が 人々の前に、

ために 彼らが見る あなたがたの 良い 業を

そして 彼らが讃える あなたがたの父を 天におられる方を。

17 あなたがたは思うな 次のことを

私は来た 解体するために 律法を あるいは 預言者を。

私は来なかった 解体するために そうではなく 満たすために。

18 なぜならアーメン 私は言う あなたがたに。

過ぎ去るまで 天と地が、

一つのイオータ (ヨッド) あるいは 一つの画は 決して過ぎ去らない 律法から、
すべてのことが 起こるまで。

19 そこで誰でも 解く者は 一つを これらの戒めの 最も小さいものの

そして 教える者は このように 人々を、

最も小さい者と 呼ばれるだろう 天の国の中で。

だが誰でも 行う者は そして 教える者は、

この者は 大きいと 呼ばれるだろう 天の国の中で。

20 なぜなら私は言う あなたがたに 次のことを

もし 優っていないなら あなたがたの 義が

律法学者たちとファリサイ派たちのより、

決してあなたがたは入れない 天の国に。

「新共同訳」

13 「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。
14 あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。15 また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

17 「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。18 はっきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消えうるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。19 だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。

20 言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていないければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

① 「あなたがたは地の塩である」

① a 「あなたがたは…である」

① a ⑦ 13—16節には「あなたがた」が5回も登場する。この「あなたがた」は山の上に集まり、イエスから「山上の説教」を聴いている弟子と群衆である。イエスは3—10節で「心の貧しい人々…平和を実現する人々…義のために迫害される人々は、幸いである」と三人称で語ってから、11—12節では主語を「あなたがた」に変え、迫害にもくじけないキリスト者に「大きな報い」を約束し、13節以下へと進む。この「あなたがた」への語りかけは、7章23節まで続く。7章24—27節は5章3—10節と同じように三人称への呼びかけに戻し、「山上の説教」を閉じている。この「あなたがた」はキリストのもとに集まり、彼の言葉に従って生きようとするすべての人たちを指している。

① a ⑧ 冒頭に置かれた代名詞「あなたがたは」は強調のためかもしれない。そうであれば、「まさしくあなたがたこそが」という意味になる。動詞は直説法であり、決して「地の塩になりなさい」という命令でも、「地の塩なら」という仮定でもない。

① b 「地の塩」

① b ⑦ 塩には味つけ、清め、腐敗防止といった働きがある。レビ記2章13節によれば、奉納物には塩がふりかけられる。民数記18章19節は、神と民との間にかわされた約束を表すために、永遠に変らない「塩の契約」という表現を使っている。また、エリシャはエリコの町の水源に塩を投げ入れて良い水に変えた(王下二21)。塩は、ラビの伝統では知恵のシンボルとも考えられている。

① b ⑧ 古代の塩は現代の塩のように純粋で白色ではなく、多くは、不純物の混入した岩塩であった。マグネシウムやカルシウムなどの化合物が混ざっており、純度が高くなかったので、湿気に

よって溶け出すこともあった。塩である「あなたがた」の塩味は、イエスに従うことよ
て与えられる。

③「馬鹿になる」

「塩に塩気がなくなれば」を、字義どおりに訳すと、「その塩が馬鹿になるなら」となる。もち
ろん、塩味が失われるということを表す。マルコは塩が「塩気をなくす（アナロス）」という言
葉を使うが、ルカとマタイは「馬鹿になる（モライノー）」を使う。モライノーに変えたの
は、時のしるしを見逃す弟子や人々の愚かさをほのめかすためかもしれない。

④「投げられ：踏みつけられる」

イザヤ63章3節などによれば、踏みつけるのは神とされるので（イザ六三6、一〇6を参照）、
この言葉には審きのイメージがつきまといている。イエスの招きは救いの業であるが、これに
じないものは自ら審きを招いていることになる。また「外に」投げられるという意味では、マ
イ22章13節のように祝宴の外の暗闇に放り出されるといイメージも関係していると思われる。
⑤イエスは、彼との関わりに生きようとして集まった人々に、「あなたがたは地の塩である」と宣
言する。「地の塩であれ」とは言わずに、「地の塩である」と言い切っているから、彼らはすでに
「地の塩」である。この事実立つイエスは、二行目以下で、「塩が馬鹿になってしまった」と
きのことを仮定する。そのときには、食物の味を引き出す働きをなくしているので、「外に投げ
られ、人々によって踏みつけられること以外に」道はない。この段落では、キリスト者が役割を
果たせなくなったときのことを述べている。

⑥キリスト者を「塩」や「光」にたとえる言葉は、マルコにもルカにも見られるが、両者は切り離
され、別々の文脈に登場する（マコ四21と九51、ルカ一33と一四34）。おそらくは、元来は
相互に関係づけられずに伝えられた言葉がマタイによって組み合わせられ、キリスト者の特徴を表
す象徴的な表現として「山上の説教」に組み込まれたのだと思われる。このことから考えても、
13—16節を、13節、14—15節、16節の三つの段落に分けることができる。

②「あなたがたは世の光である」

①「世の光」

13節の「地の塩」はイエスの弟子たちが世界に働きかける遠心的な動きを述べ、「世の光」は、
その光を目指して世の人々が近づいてくる、求心的な動きを表すと見える。また、ヨハネ福音書
で語られるような「真の光」としてのイエス・キリストとの関連で考えるなら、イエスに従う者
が光である根拠は「真の光」を反射する者、あるいは「真の光」がその内に住んでいること、神
の宮とされた土の器としてである。

②「町」

ナザレもエルサレムも山の上の町であるが、これはパレスチナに特徴的な光景である。またイザ
ヤ2章との関連で考えれば、「山の上の町」は、山は固く立つてゆるぐことのないシオンの山で
あり、エルサレムのこと。マタイがイザヤ2章を念頭に置いていたのなら、イエスに従う者こそ
は新しいエルサレムの町として世界に光をもたらす者ということになる。

③「家にあるものすべてにそれは輝く」

パレスチナではたいいていの家は一間であるから、燭台に置かれたともし火は家全体をくまなく照

らすことができる。イエスに従う者の光はそのように、この世のすべての人に向けられるべき光である。この光を升の下に置いて隠してしまえば、誰も光を見ることはできない。独り占めにされた光は、光としての意味を失う。それは光を託された方への裏切りでもある。

④ 14―15節でも、イエスは彼のもとに来た人々に「あなたがたは世の光である」と語りかけ、光の特徴が「隠れることができない」ことにあると教えるために、二つの比喻を持ち出す。まず光が「山の上の町」にたとえられる。ナザレにせよ、エルサレムにせよ、「山の上の町」は他の物に覆われることがないから、「隠れることができない」町である。

⑤ さらにイエスは人々を「ともし火」にたとえる。人はともし火を柵の下に隠さずに、燭台の上に置き、家中に光を投げかけるようにする。「山の上の町」も「ともし火」も隠れることができないように、キリストと関わる者も隠れることができない。この段落では、キリスト者が果たすべき役割を肯定表現で述べている。

③あなたがたの光が輝きなさい

① 「輝きなさい」

⑦ この命令は、14―15節に語られてきたことの結論となる。「あなたがたの光が輝きなさい」というとき、その光は神から託されたものである。しかし、託された光を人々の前に明らかにするか、しないかという責任はイエスの弟子にある。

⑧ 16節の「輝きなさい」は15節の「それは輝く」と同じ動詞であるから、第二段落の比喻がこの段落でも続いていると言えるが、この段落の冒頭に「このように」とあるから、第一段落を含めた結論部分と見るのがよいと思われる。

② 「良い業を」

ユダヤ教の伝統に従えば、神の義に基づいた他者への慈愛を表す。ここでは複数形が使われており、一般的な概念としての「業」であるだけでなく、具体的な一つ一つの業の集まりをも意味していると思われる。それは旅人をもてなし、困っている人に衣食を提供し、病人を見舞うことなどである。しかし、これらの良い業は、人が誇るためでも、そのこと自体に意味があるのでもない。その行いを見た人が神を讃えるようになるためにある。

⑨ イエスは「あなたがたの光が輝きなさい」と述べているのであって、「あなたがたが光を輝かせなさい」と言っているのではない。「輝きなさい」は三人称の命令形。イエスが期待していることは、キリスト者が自ら光を輝かせるのではなく、与えられた光を覆って隠してしまわずに、人々の前に輝くようにと手伝うことである。そうするとき、人々が「あなたがたの良い業を見て、あなたがたの父を讃える」ことができる。

⑩ 「輝きなさい」は動作の開始を表す時制（アオリスト）である。従って、イエスのもとに行き、イエスと関わる時、光が与えられ、その光が輝き始めるということを表す。

④律法と預言者を満たすため

① 「律法と預言者」

マタイに特有の表現であり、旧約全体を表している。7章12節には「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」とあり、

旧約全体は黄金律に集約されると説かれている(二二40)。「律法と預言者」という表現が用いられている5章17節と7章12節との間で、行くべき「あなたがたの義」が示されている。

⑥「満たすために」

「完成する・成就する・実現する」をも意味する動詞プレロオーのアオリスト不定詞。イエスがその生涯を通じて律法の戒めを破らずに守ったことのみを表現したければ、「守る(テレーイン)」のほうが適切だろうが(一九17、二三3、二八20)、マタイは「満たす」を使うことによって、旧約の「成就と実現」を主張したかったのだと思われる。

⑦「イオータ(ヨッド)」

イオータはギリシア語アルファベットの九番目の子音字であるが、この表現の背景にはヘブライ語(アラマイ語)があるとされる。イオータに対応するヘブライ語(アラマイ語)の子音字はヨッドであるが、ヨッドはアルファベットの中で最小の文字である。そこから「一つのヨッド(＝イオータ)」は「取るに足りない小さいもの」を表す慣用語となった。形が点に似ているので、「一点」と訳される。「画」は「小さな角」を意味し、ヘブライ文字の上につける短い線。「決して過ぎ去らない」。強意の否定表現が使われ、しかも「一つの」によってさらに否定が強調される。「律法から」。「律法の簡条のうちから」の意味。

⑧「これらの最も小さい戒めを解く者」

教会の中には、キリストが到来した今、律法は意味のないものとなり、守る必要はない、と主張する者が現れた。マタイはこのような律法理解をする人々を批判する。

⑨17節の「解体する」と18節の「解く」は同族の動詞である。イエスは「律法と預言者」を解体するためではなく、満たすために来た。律法を無視する者たちをイエスは批判するが、ユダヤ教と同じように律法を守ることを求めてはいない。「あなたがたの義」は「律法学者やファリサイ派の人々の義」に優らなければならない。

⑩あなたがたの義が優っていないなら

⑪「優っている」

ファリサイ派は、書かれた律法だけでなく、口で伝承された律法も重んじていたから、膨大な数の律法を守らなければならなかった。イエスが「律法学者やファリサイ派の人々の義に優らなければ」というとき、守る戒めの数で凌駕すると言うのではないはずである。

⑫「義」とは、神との関係を大事にして生きる姿勢、つまり戒めに込められた神の思いを聞き取り、その声に応じた行動を取ることを表す。膨大な律法を守ろうとすれば、掟が目指していた本来の意味を忘れ、守るといふ外面にとらわれることに陥りかねない。イエスが求めているのは、掟を骨抜きにせず、その本来の意味に目を向けて生きることである。

⑬「天の国」

⑭19・20節に用いられており、17―37節のキーワードの一つである。神が与えた掟はいずれも、本来、天の国の倫理を映し出していた。イエスは人間が曇らせてしまったそれらの掟を取り上げ、一つ一つの掟に響いている天の国の姿を示す(21節以下)。

⑮マタイ福音書5章21―48節には、モーセの律法について、昔の人々の解釈とは対立的なイエスの解釈(これを反立命題と呼ぶ)が展開されている。これらは「あなたがたも聞いてい

るとおり……しかし、わたしは言うておく」という句に導かれる。「わたしは言う」とは当時の律法の教師が、律法の解釈や生活への適用について意見を述べるとき決まり文句である。イエスもこれにならない、昔の人が見落とした律法の根本に遡ることによって、掟の新しい理解を、権威を持って告げる。イエスは新しいモーセとして描かれている。

⑥ イエスが求めた「義」

① イエスのもとに集まった「あなたがた」は地の塩である。イエスに従う「あなたがた」は塩としての役割を担っているが、その塩味はイエスに従うことによって与えられる。イエスに従うことなしに、塩は塩となることができない。味を失った塩はなんの役にも立たず外に投げ捨てられて人々に踏みつけられる。

② 「あなたがた」は世の光でもある。しかも、隠されてはならない「光」であるから、まず隠れることのできない「山の上の町」にたとえられる。町が山の上に建てられるのは、防衛のため、あるいは通商のため見晴らしが良く交通の便の良い山や丘が選ばれるからである。山の上の町は隠れることができない。イエスに従う者の生活も世の人の目から逃れられず、良きにつけ悪きにつけ、注目されざるをえない。

③ ともし火をともし、升の下に置いて、その輝きを閉じ込めてしまうのは愚かなことであり、そのようなことをする者はいない。イエスに従おうとする者はイエスから与えられた光をただ自分たちだけで楽しむことは許されていない。イエスに従う者は、言葉と行動とによって、イエスの光を外に輝かせる。

④ イエスに従う者が塩味を失えば、「人々によって踏みつけられ」ても仕方がない(13節)。彼らの使命は、光が「人々の前に」輝くのを妨害しないことにある。13節「あなたがたは地の塩である」でも、14節「あなたがたは世の光である」でも、すでに現実となっている状態が述べられており、16節だけに命令形が使われるが、「あなたがた」への命令ではなく、「あなたがたの光」への命令である。すでに光が与えられており、それが輝き出ようとするのを邪魔しないことが、「あなたがた」に求められている。

⑤ イエスは「地の塩であれ、世の光であれ」と教えたのではない。それは努力目標なのではなく、すでに招き入れられた者の現状である。すでに塩となっているから、その味を失わないように、キリストに留まる。すでに光となっているから、その光を覆い隠さずに、人々の前に示し、その光がどこから来たかを指し示す。

⑥ ハバクク書3章では、神への賛美が語られている。ことに、結びにあたる17―19節では、「定められた時のために、もうひとつの幻があるからだ。それは終わりの時に向かつて急ぐ。人を欺くことはない。たとえ、遅くなっても待つておれ。それは必ず来る、遅れることはない。見よ。高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる」(ハバ二3―4)に示されているように、神への信頼のうちに待つことが語られている。

⑦ イエスを通して明らかにされた神の業への信頼が、あなたがたに「義」を行わせる。それが律法学者やファリサイ派の人々の義に優るのは、イエスとの結びつきの中で行うからあり、イエスから受けた「光」が輝くように、「あなたがたの義」は神の言葉に聞き従うときに可能となる。山上の説教が求める「義」は、救われた者が救いを明らかにするための行動である。